

国立市における市民協働型農園 「くにたち はたけんぼ」の取組み

—市民と農業のつながりの創造—

研究員 大友 和佳子

目次

- | | |
|--------------------------|-------------------|
| 1. はじめに | 4. 市民の協働を引き出すポイント |
| 2. 国立市の概要と農業の特徴 | 5. 今後の発展方向と課題 |
| 3. 市民協働型農園「くにたち はたけんぼ」概要 | 6. おわりに |

1. はじめに

2019年8月、「都市住民に農業を身近に感じてもらい、協働で（共に）農業を守る市民協働型農園というしくみがある。」という話を耳にし、東京都国立市谷保地域を訪れた。国立市は、新宿から電車で1時間程度の人口76,000人ほどのコンパクトな都市である。最寄の谷保駅から5分程度南方向に歩くと1100年の歴史を持つ谷保天満宮が現れ、その脇を通ると実にのどかな田園地帯が広がっている。

高度経済成長以降の都市化を経て、農家人

(写真1) くにたち はたけんぼ



(出典) NPO法人くにたち農園の会

口が人口全体の3%となった日本では、都市住民（消費者）から農業や農家は見えにくい存在となった。こうした状況に対し「農業や農家に興味のある人は誰でも農業を守ることが出来る。」しくみとして市民協働型農園「くにたちはたけんぼ」¹があると言う。本稿では、次世代の都市と農村の新たな関係を模索する目的で、国立市の「はたけんぼ」のしくみを、市民協働²の視点からレポートしていきたい。

2. 国立市の概要と農業の特徴

まず国立市の概要と農業の特徴を簡単に説明したい。国立市は東京都の多摩地域に属し、本土部のほぼ中央に位置している。東は府中市、西は立川市、北は国分寺市、南は多摩川を挟んで日野市と接している。地形は北部の立川段丘から、南に向かって青柳段丘、多摩川沖積低地の3つに分けられ、面積は815haの小規模な街である。1965年くらいから現在まで人口・世帯数は共に増加しており、2019年の人口は76,000人ほどである³。高齢化率は22.4%であり、今後更に比率は高まると推

1 これ以降、「はたけんぼ」と明記する。

2 「協働」とは、複雑の主体が、何らかの目標を共有し、共に力を合わせて活動することを言う。

3 国立市統計<http://www.city.kunitachi.tokyo.jp/about/about1/shoukai/1465447620231.html> (2019年7月3日最終アクセス)

(図1) 国立市 地図



測されている。

農家数は、2000年の210戸から2015年には109戸と半減している。自給的農家と販売農家がほぼ同数で、自給的農家の半数は70歳以上であり、高齢化している。農地は市の南部地域に集中し、農地面積は59.7ha、市域の7.3%を占める。農業産出高の割合は、野菜が79%と最も多く、次いで果樹9%、花き8%、稲・麦類4%と続いている^[1]。

国立市で産出された農産物の大半は市民に消費されており^[1]、地産地消への需要は大きいと言える。市としても「農のあるまちづくり」を掲げている。国立市が実施した市民アンケート調査^[1]によると、「高くても、安全・安心なものを購入する」と回答している市民が約3割おり、農業者にも「農地の単位面積あたりの収益をあげたい」「市民の安全で安心な食生活のための減農薬や有機農業の取り組みをしたい」という声がある^[1]。こうした両者の意向を結びつけるしくみ作りが、長年の市の課題でもあった。

「はたけんぼ」は、こうした市の課題を背景に誕生している。

3. 市民協働型農園「くにたち はたけんぼ」概要

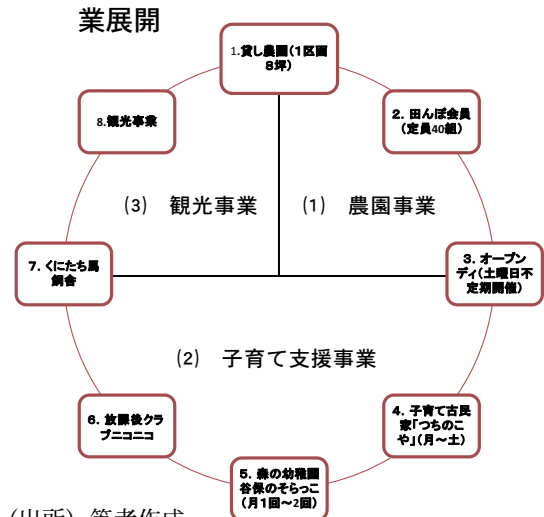
それでは、「はたけんぼ」の概要を説明したい。「はたけんぼ」は、2002年の国立市における「農業・農地を活かしたまちづくり」事業協議会によって発足した。この協議会では、農地の価値を生産の側面のみならず、景観や市民の憩いの場として幅広く評価し、文化的、教育的価値や公共性を、広く市民に理解してもらうための「農園モデル」が模索された。その後、2003年に任意団体「くにたち市民協働型農園の会」が市民によって立ち上がり、国立市と地主と団体三者で協定を結び、閉園した梨園跡地に「はたけんぼ」が開園した。

現在は2016年に組織体制を整えたNPO法人「くにたち農園の会」が運営主体である。

「はたけんぼ」の特徴は、言うなれば農業が持つ「多様な力」を活用し、様々な地域課題の解決につなげている点である。それゆえに非常な多様な事業を展開させている⁴。

多様な事業展開を図2に示した。

(図2)「くにたち はたけんぼ」の多様な事業展開



(出所) 筆者作成

4 多様な事業展開の在り方を理解するためには、SDGsにおける「地域課題は根底で全てつながっている」という考え方が参考になるだろう。現在、国を挙げて取り組んでいるSDGsでは、地域における課題を部分的ではなく包括的に捉える重要性を指摘している。いわば、地域全体の持続性のためには、一つの地域課題のみに着眼するのではなく、課題同士の連関を理解し対応する必要があるということである^[2]。

事業は大きく [1] 農園事業 [2] 子育て支援 [コミュニティ] 事業 [3] 観光事業の3つに分けられる。

(1) 農園事業

1) 貸し農園 (1区画8坪)

企業や団体を対象とした収穫体験や食育、交流や研修の場としての畑を貸し出している。年間利用料は60,000円で、有料で管理の手伝いも可能である。

(写真2) 貸し農園



(出典) 筆者撮影

2) 親子田んぼ会員 (定員120組)

年会員と都度会員があり、年会員は大人1人10,000円(2人目以降7,000円)、子供1人8,000円の会費(2人目以降5,000円)、都度会員は1回4,000円(大人のみ)の会費である。

3) オープンデイ

誰でも農園での農作業に参加可能な開放日である。活動日は土曜日不定期開催の11時から14時で、参加費は100円で3歳以下は無料である。

(写真3) オープンデイの様子



(出典) NPO法人くにたち農園の会

(2) 子育て支援 [コミュニティ] 事業

4) 子育て古民家 つちのこや

谷保の甲州街道沿いにある「やぼろじ」の母屋で行われている子育て支援プロジェクトである。2018年に「国立市地域子育て支援拠点事業」の委託を開始してのスタートである。江戸時代から続く旧家「本田家」の敷地にある空家を改築したシェアオフィス&コミュニティスペースで、月曜日から土曜日にかけて、日替わりの食堂や親子で過ごせる場所、様々なイベントなどを提供している。

(写真4) 子育て古民家 つちのこや



(出典) 筆者撮影

5) 森の幼稚園 谷保のそらっこ

月1回～2回開催で平日10時から13時
で、参加費は1回2,000円である。

6) 放課後クラブニコニコ

毎週月・水・木曜日の14時30分から17時
30分で小学校1～6年生が対象。都度参加
1,000円/回、週1回参加3,000円/月 週
2回参加6,000円である。

7) くにたち馬飼舎

リトルホースと触れ合う会で、毎月第3
日曜日（現在、お休み中）。未就学児童は
1,000円、小学生は1,500円である。

(写真5) くにたち馬飼舎



(出典) 筆者撮影

(3) 観光事業

8) 東京アーバンツーリズム

学生団体「たまこまち」と連携した外国
人案内サービス、宿泊と農業体験を結びつ
けた外国人向けゲストハウスの運営である。

「はたけんぼ」全体の年間利用者数は、2018
年のNPO法人くにたち農園の会の決算報告
によると5,267人で、全体の事業収益は1,000
万円である。

4. 市民の協働を引き出すポイント

以上のように、多様な市民の協働によって
農園運営をめざしている「はたけんぼ」であ
るが、協働を引き出すポイントについて代表
を務める小野淳氏のインタビューを抜粋する。

「市民の協働を引き出すには、市民が共感
できる事業運営が鍵になります。例えば、超
高齢社会の時代ですから子育て支援は誰しも
が必要だと感じる事業です。こうした市民の
共感を得やすい事業を農園運営と結びつけ、
協働を引き出しています。農業が持つ「農の
力」は様々な課題解決に活用できると考えて
います。」

「農の力」を市民生活の課題に結び付け、
市民と農業をつなげる手法は、今後の農業の
在り方を考える上で大いに参考になるだろう。

小野氏の考える「農の力」についてインタ
ビューをした。

(写真6) 小野淳氏



(出典) NPO法人くにたち農園の会

「農の力には、次のようなものをイメージ
しています。食の供給はもちろんですが、加
えて、「結」「学」「癒」「遊」「美」です。「結」
は助け合い・相互扶助、「学」は我々自身を知
ること、「癒」は農作業における人々のストレ
スの軽減、「遊」は昔の子供のように畑を遊ぶ

場とすること、「美」は植木や花などを愛でることです。こうした様々な要素を含む「農村」「農業」という「農の力」を市民に開放し、地域課題を解決しながら、農地を永続的に未来に残すことが「はたけんぼ」のゴールです。」

5. 今後の発展方向と課題

最後に、「はたけんぼ」のゴールと課題について小野氏のインタビューを引用しつつまとめたい。小野氏は次のように語る。

「この地域の農地は1000年以上続いています。農地を守り、次世代に活性化した形で残していくことを目標としています。

また、このあたりは手掘りの用水が残っています。手掘りの用水は、生物多様性を守る上でも非常に貴重です。このような世界は、この地域の重要な財産です。農家はただの農業従事者ではなく、この地域の歴史を引き継ぐ資産のような方々です。そうした資産に敬意を払い、次世代の子供たちに農地をつないでいきたいと考えています⁵。」

また、現在の「はたけんぼ」の課題には、子育て支援など地域住民向けのサービスが、収益をあげづらいことがあると言う。子育て支援は市民の協働を促し共感を得ていくには重要な事業である。しかし、収益性といった面からは弱いのである。そこで、今後は、収益事業として、観光事業にも力を入れていく方針である。具体的には、東京アグリアーバンツーリズム：学生団体「たまこまち」と連携した外国人を対象とした日帰りの農体験サービス、宿泊と農体験を結びつけた外国人向けゲストハウス等である。

6. おわりに

本稿では、市民協働型農園「はたけんぼ」についてレポートした。2015年の「都市農業振興基本法」制定以降、「都市に農業は必要である」という認識が生まれつつあり、日本の都市における農的空間の意義の再認識が進んでいる。

「はたけんぼ」では、農地を子育て支援や観光といった他の事業と結びつけることによって、新たな農の在り方を提案している。「はたけんぼ」に見られる市民協働による農園運営は、未来の都市と農村の新たな在り方として、1つのヒントになるのではないだろうか。

(参考・引用文献)

- [1] 「国立市第3次農業振興計画」、平成29年3月、国立市
- [2] 『持続可能な地域のつくり方未来を育む「人と経済の生態系」のデザイン』、筧裕介、英治出版、2019年、p. 59
- [3] 『東京農業クリエイターズ』、小野淳、イカロス出版、2018年
- [4] 『農業を地域のなかで考える』、永田恵十郎、(財)農林統計協会、1992年
- [5] 『農地を守るとはどういうことか』、棚澤能生、(社)農山漁村文化協会、2016年

5 現在では、近隣の農協青年部や若手農家と交流しながら次世代の農業の在り方について話しあっていると言う。